

木戸孝允（1833–1877）旧宅

19世紀の政治家・木戸孝允（桂小五郎としても知られる）の旧宅は萩城への歴史的なメインロードから延びる脇道に建っている。一家は2階建ての家を持つ経済的余裕があったが、2階部分は下の通りからは見えないようにしなければならなかった。武士（特に大名）を見下ろすことは無礼に当たると考えられていた江戸時代（1603–1867）には通常、2階建ては禁じられていたからだ。そのため、萩の街の通りからは、地味な平屋の町家に見える。

「和田小五郎」という名前でこの家に生まれた木戸孝允日本で、明治維新の「三傑」の一人として知られています。実父は藩主毛利家の侍医であったが、7歳の時に隣家の桂家に養子に出された。幼い頃から優れた知性を持っていたことは明らかで、1849年、養父の意向に反して吉田松陰（1830～1859）が軍事学の教鞭をとる藩校「明倫館」に入学した。そこで木戸は、松陰の西洋化と「尊王攘夷」というスローガンでまとめられる天皇への忠誠を誓い、異人を追い出すことで国家への忠誠を示す考えを受け入れ、「君主を尊び、外敵を斥けよう」とする尊王攘夷という言葉に集約した。在学中、木戸は幕府の有無にかかわらず、日本の近代化の必要性に急進的に迫られた。1858年には長州藩初の洋式軍艦の建造を監督した。

木戸は倒幕グループの一員になり、1864年の新撰組による京都での暗殺事件に巻き込まれそうになった。新撰組とは、徳川幕府が政権への暴動を鎮圧するために組織した特殊な警察組織である。芸者の恋人である幾松（1844-1887）が新撰組が木戸を暗殺しにやって来たところを目撃し、彼に警告をしたと言われている。木戸は後に幾松と結婚し、1870年代初頭の世界視察に同行することになる。1868年の幕府崩壊後、木戸は明治新政府の創設者の一人となり、1871年12月には、岩倉使節団の他の政治家や学者たちと一緒に、アメリカやヨーロッパの産業や社会を見学する航海に出た。この旅で見たもの、学んだことに影響を受け、1873年に帰国すると、さらなる政府改革を求める声を強めた。

現在、木戸の幼少期を過ごした旧宅は一般公開されている。国指定史跡に指定されており、1800年代後半の当時のまま保存されている。部屋には木戸の肖像写真をはじめ、木戸の生涯の様々なものが展示されている。裏面には「Maul & Co., Photographers and Miniature Painters of 187a Piccadilly and 62 Cheapside」と書かれており、モダンな西洋服姿の木戸が描かれている。また、木戸が幼少期に描いた書道の作品も展示されている。特に注目すべきは、床の間に掛けられている「今日」という作品である。木戸の先生が、「最上級」や「素晴らしい」というような意味を持つ「天晴」という言葉を付け加えている。